

北九州市発達障害者支援地域協議会 主な検討課題

【基本的視点】 ※ 平成30年度「アセスメントツール研究会」の議論を引継ぎ、更に発展

- 乳幼児期から成人後までのライフステージを通じて、①特性の「気づき」、②特性の「理解と評価」、③特性を踏まえた「手立て」、④次のライフステージへの「引継ぎ」を一貫して行うシステムを構築。
- 自分らしさを大切にしながら、身近な地域での自立した生活と社会参加を進める包括的支援の推進。

1 地域支援体制の構築（全ての年齢に共通する「支援の基盤づくり」の推進）

【検討課題1】 特性の気づき・正しい理解・支援（MSPA等アセスメントツールの活用）

①早期の気づき、特性評価につなぐ仕組み（健診医等との連携、問診、受診勧奨）

②評価の実施方法と評価結果の活用（評価実施機関の検討、評価者育成、情報管理と共有）

③特性理解と支援への反映（特性を踏まえた支援方針の作成と「手立て」の実施）

【検討課題2】 地域支援体制の構築（医療・子育て・教育・雇用・福祉・地域の連携）

④地域医療連携の推進（療育センターとかかりつけ医の情報共有、役割分担等）

⑤多職種連携の推進（情報共有、「手立て」の一貫性の確保、引継ぎの強化）

⑥人材育成・市民啓発の強化（研修の体系化、支援の質の向上、自閉症啓発デー等）

2 ライフステージを通じた支援（年齢ごとの課題への対応）

【検討課題3】 生涯を通じた成長支援・社会参加と「地域での暮らし」の支援

⑦幼児期からの早期支援（子育て環境の整備・構造化・コミュニケーション支援等）

⑧学齢期児童生徒の支援（自己理解・ライフスキル、思春期の問題行動への対応）

⑨青年期から成人後の支援（就労支援、生活支援、引きこもり・二次障害への対応）

⑩家族支援の強化（相談カフェなど心理的ケア、家庭内の構造化、ペアレントトレーニングなど技術的支援）

⑪重度の障害があっても地域で暮らせる環境（顕著な問題行動、強度行動障害への対応強化、成人後の支援の場の確保、自立生活の支援）

※ 11の検討課題ごとに、①現状 ②課題 ③目指すべき将来の姿・成果指標 ④具体的取組（まず出来ること） ⑤今後の進め方 を整理する。

1 地域支援体制の構築（全ての年齢に共通する支援の基盤づくり）

③ 特性理解と支援への反映（特性を踏まえた支援方針の作成と「手立て」の実施）

【地域協議会・主な意見】

- ・ 1回始めた事が直ぐ習慣化する。好きという気持ちと、止められないという気持ちがある。 [4]
- ・ 体調が悪いと思いながら、限界まで行ってしまう。自分から休むことができない。 [4]
- ・ 発達障害のある子どもが抱えている「適応の難しいポイント」を整理する。 [3]
- ・ 学校の中で適応行動が取れないことを「個の問題」とされがちなことが問題である。 [5]
- ・ 発達障害は周囲との関係性の中で起きている障害だということを理解すべき。本人と関係する人は誰かということを考えて、子どもの意図や行動の背景を理解して支援に反映することが大事。 [5]
- ・ 発達障害への対応は①ソフト（言葉かけなどの対応）、②ハード（環境調整・構造化）、③薬物治療があり、まずは身近なところで①②を実践することが重要である。 [2]
- ・ 日頃からメモ、ホワイトボード、LINEなどで会話を「視覚化」し、冷静なやりとりを積み重ねることで、家庭内でのパニックや親子間の衝突を避ける。 [1]
- ・ 視覚化（図や絵の活用、言葉を紙に書く）などは通常級でもできるのでは。 [2]
- ・ 学習・行動理論の実践として「して見せる」はモデルを示して一緒に考える。「させてみて」は行動のリハーサル、一緒に体験して、褒められる体験を教える。 [6]
- ・ 学校や職場からの帰宅直後は極度の緊張、疲労からパニックが起こりやすい。一人静かに過ごすのが良い。また登校前も不安や葛藤からパニックが起きやすい。 [1]

《基本的視点》

- ・ 発達障害の基本特性である「感じ方」や「(事物の) 捉え方」の凸凹は個々人の生得的な特性に起因するものであるが、発達障害のある子どもや大人が直面する生活上の困難（生きづらさ）は、その人と周囲の環境との相互作用により生じるものである。
- ・ このため、発達障害のある人とのコミュニケーションがうまくいかない場合や、その場にそぐわない行動が生じたときに、その「困難さ」の要因を専ら本人の内面に求めて改善を図るのではなく、周囲の人の行動や環境をその人の特性にあわせて整えていくことが重要である。
- ・ 発達障害児者の支援については、絵カードを用いた視覚的コミュニケーションなど、有効性を実証された支援手法や支援ツールが広く知られるようになり、学びの機会も広がりつつある。
- ・ これらの知見に基づき、その人にとってわかりやすい手法を用いて当事者と家族や支援者が「やり取り（対話）」を重ね、必要な環境を整えて支援を進め、次のライフステージに支援を引き継ぐことにより、生涯を通じて発達障害者の生活の質（QOL）の向上を図る。

《取り組みの方向》

- ・ 発達障害のある人一人ひとりの特性に合った接し方や方法を早くから選び、環境を整えることで、その人が持つ本来の能力を引き出し、生きやすい環境のもとで快適な生活を送れるように支援を進める。
- ・ まずは、周囲の環境を視覚的にわかりやすくする「構造化」をはじめ、必要な支援がどれだけ進められ、次のライフステージに引き継がれているか、地域社会の現状を把握して今後の方策について検討する。

【現状】

- ・ 北九州市内の障害福祉サービス事業所における支援の現状（平成29年1～2月調査）

発達障害者の支援について、困っていることがある … 84.5%

〔困っている内容〕 特性をどう評価したらよいかわからない（33.3%）

行動問題への対処の仕方がわからない（32.6%）

【課題】

- ・ 発達障害者の特性を踏まえた有効な支援手法や、必要な支援ツールの普及、定着

【目指すべき将来の姿】

発達障害のある人一人ひとりの特性を踏まえた支援手法や支援ツールの活用法を本人・家族・支援者が身近なところで同じように学ぶことができ、生活の場で切れ目なく提供されている。

【成果目標】

（発達障害者の支援について、困っていることがあると答える支援者の減少）

（※生きづらさを抱えた当事者の減少）

【具体的取組】 令和3年度～

（発達障害者支援地域協議会「専門部会」の設置、必要な支援方法や支援ツールの普及について検討）

（当事者・家族・支援者へのアンケート調査の実施、現状把握）